（別紙様式３）

令和３年　３月３０日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長　殿

住所　福島県福島市杉妻町 2-16
管理機関名　福島県教育委員会
代表者名　鈴木　淳一

令和２年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を，下記により提出します。

記

１　事業の実施期間
令和２年　５月　２５日（契約締結日）～　令和３年　３月３１日

２　指定校名・類型
学校名　福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校
学校長名 柳沼　英樹
類型　Ⅱ　グローカル型

３　研究開発名
原子力災害からの復興を果たし、新たな地域社会を創造するグローバル・リーダーの育成

４　研究開発概要
〇カリキュラム開発：カリキュラム全体の柱として学校設定科目「地域創造と人間生活」と「未来創造探究（総合的な探究の時間）」で 3 年間を貫き、地域課題解決の探究と海外研修を体系的に位置づけ、地域と世界の課題解決に貢献する資質・能力を育成するとともに地域に貢献する人材としての在り方生き方を涵養するカリキュラムを開発する。
〇地域課題解決に貢献する人材育成：地域・世界が直面する困難な課題を理解し、自らの在り方生き方を考え、また実践を重視した地域課題解決の探究を行い、その解決に貢献できる人材を育成する。
〇双葉郡との広域連携による教育と復興の相乗効果を創出し、全国へ発信する。

５　学校設定教科・科目の開設，教育課程の特例の活用の有無
・学校設定教科・科目　開設している
・教育課程の特例の活用　活用している

6　運営指導委員会の体制

氏名	所属・職	備考
飯盛　義徳	慶應義塾大学総合政策学部教授	プラットフォームデザイン、地域イノベーション
田熊　美保	経済開発協力機構（OECD）教育局教育訓練政策課シニア政策アナリスト	教育政策国際比較、教育政策評価、Education2030
田村　　学	國學院大學人間開発学部初等教育学科教授	総合的な探究の時間の指導、カリキュラム研究

7　高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者
双葉郡教育復興ビジョン推進協議会（双葉郡浪江町教育長、双葉郡教育復興ビジョン推進協議会及び双葉地区教育長会　代表）	笠井　淳一
福島大学人間発達文化学類教授	中田　スウラ
公益社団法人福島相双復興推進機構(福島相双復興官民合同チーム)専務理事	新居　泰人
公益財団法人福島イノベーション・コースト構想推進機構　教育・人材育成部長	山内　正之
認定 NPO 法人カタリバ　双葉みらいラボ拠点長	長谷川　勇紀
福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校長	柳沼　英樹
福島県教育委員会　教育次長	鈴木　芳人

8　カリキュラム開発専門家，海外交流アドバイザー，地域協働学習支援員

分類	氏名	所属・職	雇用形態
カリキュラム開発専門家	長谷川　勇紀	NPO 法人カタリバ双葉みらいラボ拠点長	非常勤
海外交流アドバイザー	島田　智里	ﾆｭｰﾖｰｸ市役所公園局都市計画＆GIS スペシャリスト	非常勤
地域協働学習支援員	平山　勉	双葉郡未来会議　代表	非常勤

9　管理機関の取組・支援実績

（1）実施日程

業務項目	実施日程											
	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
各種事業の支援	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
関係機関との連携	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
運営指導委員会										○		
コンソーシアム										○		

（２）実績の説明

①管理機関における主体的な取組について

・教員加配による支援

・海外研修費に係る費用の支援

・探究活動や外部講師活用に係る費用の支援

・運営指導委員会、コンソーシアム協議会の開催

・県主催各種発表会や研修会の開催

・成果の普及（アクティブラーニングをテーマに研修会を実施し、ふたば未来学園の取組が普及している）

②事業終了後の自走を見据えた取組について

・コンソーシアムの構築

・費用面での支援の可能性を検討

③高等学校と地域の協働による取組に関する協定文書等の締結状況について

・コンソーシアムについて、要項を作成し、趣旨を共有

１０　研究開発の実績

（１）実施日程

業務項目	実施日程											
	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10 月	11 月	12 月	１月	２月	３月
１年「産業社会と人間」における地域探究学習、国際理解学習			３回	３回		２回	４回	３回	５回	３回	２回	２回
２年「総合的な探究の時間」における地域探究学習	１回	４回	４回	５回	１回	３回	５回	３回	２回	３回	３回	１回
３年「総合的な探究の時間」における地域探究学習		１回	４回	３回	１回	２回	３回	３回	２回	３回		
研修（生徒）										２回	１回	３回
発表会、交流会等						１回	１回	１回	１回	２回		１回
研修（教員）	１回	２回	１回			１回		１回	１回	１回	１回	

（２）実績の説明

①研究開発の内容や地域課題研究の内容について

○１年「産業社会と人間」における地域探究学習、国際理解学習

・地域を知るための導入講座（事前調査、プチ課題探究、フィールドワーク、振り返り）

・思考を整理するためのスキル学習（マインドマップ講座）

・地域を深く理解するための演劇創作（バスツアー、地域住民へのインタビュー、演劇の手法を用いたコミュニケーションワークショップ）

・国際理解講座（イラク難民の現状から国際的な課題を捉える講座、SDGs による国際的な課題と地域課題との接続）

・地域探究活動への導入講座（地域で活動している方によるヒューマンライブラリ等）

○２年「総合的な探究の時間」における地域探究学習

・地域探究活動オリエンテーション（課題の捉え方、課題設定の方法、仮テーマ設定）
・地域探究活動（テーマ設定、ゼミ配属、調査アクション、課題解決アクション）
○３年「総合的な探究の時間」における地域探究学習
・地域探究活動（課題解決アクション）
・論文作成
○研修（生徒）（海外研修については感染症対策のため国内代替研修を実施）
・英語活用力養成のためのブリティッシュヒルズ研修（１，２年）
・環境問題を捉えるための徳島研修（１年）
・ドイツの学校との福島や世界の課題に関する対話研修（１年）
・国連 UNIS-UN 研修（オンライン、２年）
・国連職員との福島や世界に関する課題に関する対話研修（２年）
・課題の伝承に関する研修（広島研修、１年）
○発表会、交流会等
・生徒研究発表会（９月、３年生による地域課題探究発表会、４９発表）
・プレ発表会（１０月、２年生によるテーマ設定の報告会、６２発表）
・ふたばアワード（１１月、１～３年による学年横断型の地域課題探究発表会、１８発表）
・演劇を通して地域の課題を知る学習成果発表会（１２月、２０発表）
・ふくしま高校生社会貢献活動コンテスト（１２月、福島県内高校生対象の発表会、本校から３件応募、最優秀賞賞、福島大 AC 賞受賞）
・ふくしま学（楽）会（８月および１月、早稲田大学が主催する産官学による地域復興に取り組む学会、本校から７発表、パネリストとして生徒８名が登壇。この様子は NHK スペシャル「廃炉への道２０２１」に取り上げられた。）
・Glocal High School Meetings 2021（１月、本事業（グローカル型）に指定された高校による探究活動コンテスト、日本語部門１件、英語部門１件発表、日本語部門で金賞、文部科学省初等中等教育局長賞（最高賞）を受賞）
・第 20 回福島県総合学科高等学校生徒研究発表会（1 月、本校から３件発表）
・マイプロジェクトアワード福島 summit（１月、福島県内高校生対象の発表会、本校から７件応募、このうち１件が福島県代表として全国 summit へ進出）
・マイプロジェクトアワード全国 summit（３月、福島県代表として１発表）
・地域をつなぐ世代をつなぐ世代間交流会（２月）
・長崎南高校との交流会（１２月に長崎で実施。３月に本校で実施予定だったがコロナ感染症防止対策により延期。）
○研修（教員）
・地域を理解するためのバスツアー、オンライン教育についてのスキル習得、クロスカリキュラムの検討、本校の課題の共有、地域との協働の在り方に関する講義、１年間探究活動等の総括等（11 回実施）

②地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け（各教科・科目や総合的な学習（探究）の時間，学校設定教科・科目等）
・「産業社会と人間」（１年全員対象、２単位で実施）
・「総合的な探究の時間」（本校では「未来創造探究」として実施）（２，３年全員対象、各学年３単位　合計６単位で実施）

③地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ，教科等横断的な学習とする取組について

・教員研修としてクロスカリキュラムの企画を全教員で実施し、各科目での授業において以下のような取組を行った。

・英語、数学、音楽の授業を連携させ、地域のごみ問題に焦点を当てて授業を実施。地域のゴミ処理問題（数学）、ゴミを活用したオーケストラ（英語）、海岸のごみによる楽器作成と演奏（音楽）を扱い、多様な観点から地域理解、国際理解を促した。

・英語の授業においてバナナペーパープロジェクトについて学び、地元の特産品であるバナナについて理解を深めた。

・理科においてエネルギー問題を取り上げるとともに、原子力発電所事故、処理水の扱いについて理解を深めた。等

④地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制

・本校では「変革者の育成」を教育目標とし、これを実現するために「自立・協働・創造」の力の育成を掲げている。これらの力を育成する要件として 10 項目 5 段階のルーブリックを策定し、これに基づきカリキュラム・マネジメントを行っている。教育活動の柱として探究活動（「産業社会と人間」「総合的な探究の時間」）を推進し、その主要なテーマとして地域課題を取り上げている。そのため、地域との協働による探究的な学びは本校の教育目標を実現する中心的な役割を担う位置づけとしている。

⑤学校全体の研究開発体制について（教師の役割、それを支援する体制について）

・校務分掌として「企画・研究開発部」を設置し、探究活動や教員研修の企画立案、運営を行った。構成要員として専属７名の他に中高の各学年担任も加わっており、全教員の 15%ほどを占めている。

・１年生の活動（探究活動の導入）は１学年担任と企画・研究開発部の担当者によるチームで指導した。２，３年生の活動（探究活動の実践）は６つのゼミに分かれて実施した。各ゼミは各学年の担任、教科担当者からなる３名程度の教員チームが担当し、生徒の指導にあたる仕組みを構築した。これによりほぼ全ての教員が探究活動に関わった。

・本校の探究活動においては生徒の主体性を重視しているため、多様な生徒、多様なテーマについて教員が柔軟に対応していく必要がある。教員と生徒との関わり方については、担当教員が定期的に実施しているミーティングにおいて個別のケースをとり上げて指導、対応の在り方を検討した。

⑥カリキュラム開発等専門家、海外交流アドバイザー及びの学校内における位置付けについて

・カリキュラム開発等専門家については毎週実施の本校の企画・研究開発部の定例ミーティングに出席していただいた。産業社会と人間、総合的な探究の時間（未来創造探究）の企画立案、探究指導のための担当教員ミーティングの企画立案、生徒の指導方法、教員と生徒との関わり方、評価の在り方の検討、学校内外の発表会の検討、先進校の状況の共有等について協議いただいた。

・海外交流アドバイザーについては、今年度コロナ感染防止対策の観点から海外での実地研修が行えなかったことから、あまり関与していただく機会がなかった。

・地域協働学習実施支援員については、地域を知るためのバスツアー、演劇、課題研究実践についての協議、地域を熟知している講師の選定や事前授業について相談させていただいた。また実践の場の提供、活動の地域への周知、地域の協力者の紹介等、生徒が地域に踏み込みやすい環境作りにも協力いただき、地域と本校の強力な仲介役を担っていただいた。さらに自ら地域の案内役や発表会の審査員として、多くの取組に協力いただいた。

⑦学校長の下で，研究開発の進捗管理を行い，定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ，計画・方法を改善していく仕組みについて

・研究開発の進捗については、以下のような教員チームによるミーティング等の機会を活用して情報共有、評価、改善策の検討を行った。
  ・職員会議（月に一度）
  ・企画・研究開発部（15 名程度）による定例ミーティング（週に一度）
  ・各学年の探究担当者（各学年 20 名程度）による月次会（月に一度）
  ・2，3 年の各ゼミ担当者（各 3 名程度）による定例ミーティング（週に一度）
・生徒の資質能力の状況については、年に２回ルーブリック評価を行い、その動向について企画・研究開発部が集約、分析を行い、探究担当者との共有、対策検討等を行った。
・生徒一人ひとりに対しては、ルーブリック評価をもとに、2 年生以降は各ゼミ内での生徒同士によるピアレビューや担当教員との面談（ルーブリック面談）を行い、生徒自身の活動の振り返りや目標設定の契機となった。

⑧カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について

・コンソーシアム協議会において本校のカリキュラム開発について説明し、理解を得た。カリキュラムに対しては、探究活動の課題設定段階における工夫や、普通に生活している地域の方の声を探究活動に取り入れるような活動に向かう大きな方向性について意見をいただいた。

⑨運営指導委員会等、取組に対する指導助言等に関する専門家からの支援について

・グローカル型の目標や育成したい生徒像を共有し、本校が「地域におけるプラットフォーム」となり、地域の創造性が生み出されることへの期待を託された。また生徒だけでなく教員も変革者（チェンジメーカー）となっているという評価をいただいた一方で、教員間の情報共有不足や指導経験の差による意識の差、探究と教科の連動等について引き続き対応も強化する必要性が確認された。このような外部の専門家の視点は、企画運営している教員にとっては大変貴重であり、今後の改善に向けた足がかりとしたい。

⑩類型毎の趣旨に応じた取組について

・本校は類型として「Ⅱ グローカル型」の指定を受けており、地域とグローバルな視点を重ね合わせた地域課題解決探究・学習モデルの構築等を目標としている。地域探究活動で捉えた課題や知見をグローバルな課題と照らし合わせる機会として海外研修を予定していたが、今年度は海外現地での研修は実施できなかった。しかし同様な成果を期待できるものとして、以下のような国内研修やオンライン研修を実施した。
  ・ブリティッシュヒルズ研修（１，２年ドイツ、アメリカ研修代替、英語活用力養成）
  ・徳島研修（１年ドイツ研修代替、環境問題、ゴミ問題）

・ドイツの学校とのオンライン対話研修（１年ドイツ研修代替、福島と世界の課題）
・UNIS-UN オンライン研修（２年アメリカ研修代替、福島と世界の課題）
・国連職員とのオンライン対話研修（２年アメリカ研修代替、福島と世界の課題）

これらの代替研修については生徒へ丁寧に趣旨を説明した。結果的に応募状況は通常の海外研修と同様に高倍率となり、生徒達は意欲的に取り組んだ。また研修を経て地域課題とグローカル課題の共通点を充分認識することができた。

・本校は平成30年度からアジア高校生架け橋プロジェクト留学生を受入れてり、今年度はミャンマーから１名の留学生が滞在している。留学生の視点を生かした授業や校外活動を英語教員や学年教員が積極的に行っており、生徒はグローカルな視点を常に意識している。

⑪成果の普及方法・実績について

・活動の様子等については本校のホームページにおける公表、マスコミへの周知と各種メディアへの掲載、視察者への説明等を行い、成果の普及に努めた。
・生徒の課題探究活動の成果については、学校内外の発表会により普及に努めた。今年度はコロナ禍により例年のような公開発表会は実施できなかったが、オンラインによる公開を行った。その結果、遠方からの参加者も多数参加していただくことができた。

１１　目標の進捗状況，成果，評価

本事業の目的は以下のとおりである。

A　地域での課題解決の探究と海外研修を体系的に位置づけ、地域と世界の課題解決に貢献する資質・能力を育成し、自己の在り方生き方を見出すカリキュラムの開発
B　原子力災害特有の課題に加え、全国・世界の課題が先行して生じている地域の特性を理解し、新たなコミュニティや産業を創造し、課題解決に貢献する人材の育成
C　双葉郡との広域連携による教育と復興の相乗効果の創出、及び全国の高校への波及

上記 A～C を実現するために設定した目標と進捗状況を以下に示す。

(目的 A の目標)　総合学科の入学年次必履修科目「産業社会と人間」を学校設定科目「地域創造と人間生活（令和３年度より）」に代替し、困難な地域社会の現状と Society5.0 時代の変化を踏まえた能力と態度を養い自己の在り方生き方を見出すカリキュラムを開発する。

今年度の結果：

令和 3 年度より「地域創造と人間生活」を実施するため、今年度は計画策定を行った。これまでの「産業社会と人間」の内容を精査し、3 年間の切れ目のない地域課題探究活動が実施できるような取組を導入することとした。今年度は繋ぎの年度として以下のような取組を行った。

・５月にプチ探究を実施。Will×Need×Can の３項目から自分が住む地域の課題を考え、課題解決のためのアクションについて考えさせた。その後、実際に地域で出会う様々な課題についても、その都度「自分には何ができるだろう」と考えるマインドが育った。
・様々な価値観や背景を持つ人の集団において、相互関係を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成していくトレーニングとして、演劇の手法を用いたコミュニケーション ワークショップを定期的に実施し、より効果的な合意形成のトレーニングとなるようプログラムを組んだ。結果として、正解のない課題や経験したことのない課題について表面的に受け取るのではなく、自分事に引き寄せて想像し、物事を多面的に捉えることができた。

上記のような今年度の取組を基にこれまで地域理解に留まっていた内容を、より主体的、当事

者的な立場に立った視点で活動できるよう、探究活動を重視した取り組みにしていく。

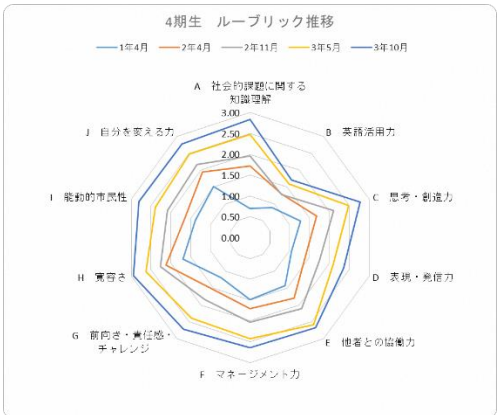
（目的Ａの目標）地域とグローバルな視点を重ね合わせた地域課題解決探究・学習モデルを構築する。
今年度の結果：以下のような取組を行った。

- ・イラク在住の高遠氏とオンラインでつなぎ国際理解講座を行った。「中東、イラク、イスラム、難民」に対するイメージと実際のギャップを、「フクシマ」に対する世界のイメージと実際のギャップと重ねて考えることができた。また講演者の生き方を通して生徒達が自身の在り方生き方を考える機会となった。
- ・金沢工業大学による「SDGs カードゲーム X」をオンラインにて実施し、国際的な取組である SDGs を通して地域の課題やそれらの解決のための様々なアクションを考えた。
- ・ニューヨーク研修代替研修としてニューヨーク在住の国連職員とオンラインでつなぎ、自分の探究活動について発表し、国際的な課題という観点から議論した。また国連国際学校が主催する生徒国際会議（UNIS-UN）に参加し、各国の同世代や各国大使・専門家等とグローバルな課題について意見交換を行った。
- ・ドイツ研修代替研修として、「ゼロ・ウェイスト（ごみゼロ）」を掲げ、究極の持続可能な地域を追求している徳島県上勝町のゼロ・ウェイストセンターを訪問し、スタディツアーを行うと共に地域住民と交流し意見交換を行った。
- ・ミュンヘンの Ernst Mach Gymnasium 校の生徒とオンラインにて交流を行った。

・今年度の段階では確固とした学習モデルの構築について途上段階ではあるものの、生徒自身が掲げるテーマを活用してグローバルな課題に目を向ける方策は、自分事として捉えやすい点、地域課題は世界共通な課題でもあることを認識できる点、様々な視点からの見方に捉えることによって問題の本質に迫ることができる点等から、有効であることがわかった。

（目的Ｂの目標）　育成したい具体的な知識・スキル・人間性等を規定したルーブリックについて、３年生最後のルーブリックレベル平均値で３．５以上を実現する。
今年度の結果：今年度の 3 年生について、以下にルーブリックの推移データ(平均値)、グラフを示す。これまでの生徒と同様、それぞれの項目について学年が上がるごとに値が上がっており、資質・能力が順調に高まったといえる。しかし最後のアンケートの平均値は 2.6 となり、目標として掲げている 3.5 には到達していない状況である。例年、3 年生の半年間で値が大きく伸長する傾向がみられていたが、今年はそれが大きくはみられなかった。コロナ禍により活動が大きく制限されたことが影響したと思われる。

	1年4月	2年4月	2年11月	3年5月	3年10月	グラフ
A　社会的課題に関する知識理解	0.69	1.71	1.96	2.48	2.83	
B　英語活用力	0.89	1.29	1.28	1.59	1.70	
C　思考・創造力	1.27	1.68	2.11	2.49	2.77	
D　表現・発信力	1.04	1.40	1.75	2.10	2.36	
E　他者との協働力	1.42	1.80	2.11	2.59	2.68	
F　マネージメント力	1.49	1.71	2.04	2.43	2.64	
G　前向き・責任感・チャレンジ	1.19	1.54	1.84	2.40	2.72	
H　寛容さ	1.69	2.12	2.26	2.63	2.95	
I　能動的市民性	1.38	1.63	2.09	2.39	2.81	
J　自分を変える力	1.51	1.95	2.17	2.48	2.78	
平均	**1.26**	**1.68**	**1.96**	**2.36**	**2.62**	



（目的Ｂの目標）地域社会への還流を見据え、地域に貢献していく在り方生き方の目標として「卒業時における、将来的な地域への貢献意識（社会との関わり）や、本事業による自身の価値観への影響の肯定的意見の割合で 70%以上」を達成する。
今年度の結果：
問１　未来創造探究は、あなたが将来「社会とどう関わって生きていきたいか」を見出すことに繋がりましたか？　回答結果：肯定的意見　88%、否定的意見　12%
問２　未来創造探究は、あなたが自分の価値観を考えることに繋がりましたか？
回答結果：肯定的意見　90%、否定的意見　10%
これらの結果から今年度の目標は達成できたと言える。

（目的Ｃの目標）地域と協働した課題探究プロジェクト数、協働する地域の方人数、来校する教育関係者等の人数、発表・コンテスト応募件数等について目標値を達成する。
今年度の結果：
・地域と協働した課題探究プロジェクト（目標：最終年度 50 件、今年度 40 件）
今年度実績： 52 件　…　目標達成
・協働する地域の方（延べ）（目標：最終年度 200 件、今年度 165 件）
今年度実績：301 件　…　目標達成
・来校する教育関係者等（目標：最終年度 250 件、今年度 200 件）
今年度実績： 178 人（発表会オンライン参加者 42 人含む）…　目標未達成
・発表・コンテスト応募件数件（目標：最終年度 45 件、今年度 200 件）
今年度実績： 39 件　…　目標達成

（目的Ｃの目標）地域復興・創生における高校の役割と、「教育と復興の相乗効果創出」の必要性を踏まえ、双葉郡 8 町村との広域的・組織的・実働的な協働体制をコンソーシアムで確立し 8 町村を面的にカバーするとともに、地域協働の場・機会として校舎や探究発表会を活用し、生徒の探究を通じて地域住民主体のウェルビーイング実現を後押しする。
今年度の結果：
・今年度はコンソーシアムの立ち上げと育成する人材像の共有を行った。協働体制をとることへの合意は得たが、具体的な活動までは至っておらず、今後の検討課題となる。
・生徒の探究活動については、昨年度まで高校所在地の近隣での活動がほとんどであったが、今年度から、より広域に活動を広げることを意識した。その結果、双葉郡全 8 町村に活動を広げることができた。一方でコロナ禍により地域住民の校舎の活用や発表会への参加は大きく制限され、課題が残る結果となった。
・地域との協働について、今年度は次のような事例がみられた。
　・本校生による地元のシンボルを使った商品開発にあたり、地域の方に材料やアイデアを提供していただきながら開発を進めた。開発した商品を地域のイベント等で紹介することによりメディア等にとり上げられ、結果的に地域の認知度向上に貢献した。
　・アートを通じて気持ちを表現する取組をしている生徒が近隣の小学校と協働してワークショップを行い、小学生への防災教育の実施に大きく貢献した。
　・地元の NPO 法人と連携して地域の拠点づくりに貢献した。拠点のデザイン等を生徒が担当し、活動を盛り上げた。

こういった事例はまだ数が少ないものの、教育と地域復興の相乗効果を具現化している好例である。今後もこのような事例を積み重ねることにより目標達成に向けて取り組みたい。

＜添付資料＞目標設定シート

１２　次年度以降の課題及び改善点

〇学校設定科目「地域創造と人間生活」の運用

令和３年度より、学校設定科目「地域創造と人間生活」を開設する。これまでの準備を踏まえて、探究的な要素を重視して３年間の切れ目のない探究活動を推進し、さらに予測困難な社会においても柔軟に対応できるような在り方生き方を見出すカリキュラムを開発していく。

〇コンソーシアムの効果的な運用による地域連携の拡大

今年度より生徒の探究活動の範囲が双葉郡８町村に大きく広がった。この状態を維持しながら、探究活動の量的、質的な発展を目指していく。そのためにコンソーシアムを効果的に運用することはもちろんのこと、コンソーシアムのみに頼るのではなく他のネットワークも活用しながら地域連携を進めていく。

〇掲げている定量的目標の達成

目的を達成する指標として掲げている目標について、今年度はいくつか未達成の項目があった。特に本校の人材育成要件であるルーブリックの値については、次年度以降、確実に目標達成できるように取り組みたい。とはいえ、この数値はあくまで生徒の資質能力を伸長させるガイドに過ぎないため、数値に囚われすぎず、生徒の実践内容や活動の様子を丁寧に見ながら指導を進めたい。そのためには教員と生徒との関わり方について教員側が知見を深めていく必要がある。本校では教員のチームによる指導体制がある程度確立されていており、この体制を活かして生徒の指導力を向上させたい。

【担当者】

担当課	高校教育課	ＴＥＬ	024-521-7773
氏　名	伊藤恵美子	ＦＡＸ	024-521-7973
職　名	指導主事	e-mail	ito.emiko@fcs.ed.jp